すみりんニュース No.94

編集・発行：公益財団法人 住吉隣保事業推進協会
編集発行人：理事長 友永 健三　　＊『すみりんニュース』は、２カ月に一度発行しています。

公益財団法人　住吉隣保事業推進協会　　〒558-0054　大阪市住吉区帝塚山東5-6-15
TEL（06）6674-3732　FAX（06）6674-3700　**http://www.sumiyoshi.or.jp/**

（この号の内容）

■「2024年 念頭にあたってのごあいさつ」友永健三（公益財団法人 住吉隣保事業推進協会理事長）……1-4
■ 第31回 住吉・住之江じんけんのつどい
第2部講演『多民族共生のまちづくりをめざして～「民族保育」の視点から』
講師：森本宮仁子さん（社福）聖和共働福祉会事務局長、ＮＰＯ法人IKUNO・多文化ふらっと（共同）代表理事…4-16
■住吉隣保事業推進協会のうごき……17-18

今号では、まず、当財団理事長による「2024年 年頭にあたってのごあいさつ」を掲載しています。次に12月2日（土）に開催した、第31回住吉・住之江じんけんのつどい第2部・森本宮仁子さんの講演記録を掲載しています。同つどい第1部では、『信じることからはじめよう、人はみな同じ』と題して、フォークシンガーの中川五郎さんによるトーク&ライブでした。ライブや講演を通じて、いまもなおある差別や人権課題に気づき、行動するにはどうすればよいのか考える貴重な機会となりました。当日は、187人にご参加いただきました。なお、連載『けんぞうの視点』は、今号は休みです。

2024年 年頭にあたってのごあいさつ

友永健三（公益財団法人 住吉隣保事業推進協会　理事長）

新しき年、2024年を迎え、日頃より（公財）住吉隣保事業推進協会に対してご支援をいただいておりますみなさまにごあいさつ申し上げます。

まずもって、去る1月1日午後4時10分に生起しました能登半島地震により、お亡くなりになりました方々へのお悔やみを申し上げますとともに、家屋損壊等により避難生活を余儀なくされておられますみなさまへの支援を、みなさまとともに誓いたいと思います。

さて、昨年の世界をふりかえりますと、ロシアによるウクライナ侵攻は間もなく3年目を迎えようとしています。双

2024年1月11日（木）住吉地区新年互礼会より

方の人的・物的被害は増加の一途をたどっていますし、世界的な物価高によって多くの人びとが苦しい生活を余儀なくされています。こうしたなかで、10月7日には、パレスチナのハマスによるイスラエルへの奇襲攻撃があり、およそ1,200人もの死者とおよそ240人もの人質がとられるという事態が勃発しました。これに対してイスラエルは、急きょ戦闘態勢を整え、かつてない規模でガザ地区への爆撃、進軍を展開しました。民家だけでなく病院や学校等への攻撃を繰り返し、2万8,000人を超すパレスチナ人が殺害（1月8日現在、この内4割が子どもたち）されています。ハマスによる奇襲攻撃は、許されるものではありませんが、イスラエルによる軍事攻撃はジェノサイドであり、国際人道法等にも違反するものであるとして、各方面から強い非難の声が高まっています。しかしながら、短期間の休戦は実現しましたが、停戦のめどはたっていないだけでなく、戦線の拡大が懸念されています。

日本では、新型コロナウイルス感染症が昨年5月に、2類から5類へと位置づけが変更されました。次第に日常生活、経済活動、インバウンドがもどってきましが、物価高で人びとの生活苦は一向に改善されない状況が続いています。このため、岸田内閣の支持率も20パーセント代前半まで低下しました。また、昨年末に、自民党の安倍派を中心に派閥主催のパーティを利用した裏金づくりの実態が明らかになりました。政治資金規正法違反の容疑で、東京地検特捜部による関係先に対する捜査や関係者に対する事情聴取が行われ、現職の国会議員が逮捕される事態となってきています。

2025年4月、夢洲で開催予定の大阪・関西万博に関しても、難題が次々と明らかになってきています。会場整備費や開催諸経費が計画当初の見積もりを大幅に増額しなければならなくなったこと、パビリオンの建設が大幅に遅れていること、国民的な関心が低調であることなどです。夢洲ＩＲ（総合型リゾート）予定地の土地改良事業に関しても、2022年7月、大阪市の財政負担の差し止めを求める住民訴訟が、2023年4月、夢洲ＩＲ用地を不当に安い価格で貸す契約は違法であるとして、契約差し止めを求める住民訴訟が提起されています。

部落問題に関しては、昨年6月28日、鳥取ループ・示現舎裁判の控訴審判決が出されました。東京高裁は、この判決のなかで、部落差別の今日的な実態を明らかにしたうえで、憲法13条（個人の尊重と幸福追求権）と憲法14条（法の下の平等）に基づいた「差別されない人格的利益」（差別されない権利）を認めました。また、この判決は、差し止める県の範囲を拡大、損害賠償金も増大させるなど、鳥取ループ・示現舎の差別言動を断罪する画期的な内容となっています。

昨年、芸能事務所である旧ジャニーズ事務所の創業者による性加害問題に関して、国内の大手マスコミがほとんど報道しなかったなかで、イギリスの報道局ＢＢＣがドキュメンタリー番組を放映しました。その番組が契機となり、日本国内でも重大な人権侵害問題として取り上げられるようになりました。7月には、国連人権理事会の「ビジネスと人権」作業部会のメンバーが来日し、関係者からの聴取や、政府、企業などの人権をめぐる取り組みを調査したほか、多くの人権団体との対話も行いました。この調査報告書では、部落問題や女性、LGBTQI+、障害者、先住民族と少数民族、技能実習生と移民労働者、労働者と労働組合のほか、子どもと若者についての問題も取り上げるとともに、差別問題や人権問題の解決のための国内人権委員会の設置を提言しています。

住吉地区においては、昨年2月に、念願であったオガリ像が住吉隣保事業推進センターの正面壁面に設置

されました。住吉住宅集会所で開催している子ども第三のいばしょ事業も2年目となり参加者も定着してきています。また、10月には、住吉東駅前で地域の交流イベントである「オガリ★ナイト」を開催しました。

新しく迎えた2024年に世界で求められている最重要課題は、3年目を迎えているウクライナとロシアの戦争、3カ月を経過したハマスとイスラエルの戦争の即時停戦と、話し合いの開始です。このためには国際社会の世論の大きな盛り上げが必要です。また、平和憲法をもつ日本政府に、このために積極的な役割をはたすよう働きかけを強めていくことが求められています。

日本国内では、何よりもまず、能登半島地震の被害者に対する官・民による本格的な支援と、南海トラフ地震に対する備えを加速することが必要です。また、年末より明らかになってきている自民党安倍派を中心とした裏金づくりの真相解明と、関係者の処罰、政治資金規正法の改正を含む再発防止のための抜本的な方策の確立は待ったなしの課題です。さらに、物価高のもとでの生活苦を解消するために、最低賃金の大幅な引き上げや教育の無償化、子育て世帯に対する施策の抜本的な充実等が実現されなければなりません。さらに、昨今の朝鮮半島や台湾海峡をめぐる軍事的な衝突の危険性の高まりを直視したとき、日本は、軍備増強によってこの事態に対処しようとしていますが、これでは、さらなる軍拡競争が生じるだけです。このようなときであるからこそ、平和憲法の理念をふまえ、全方位的に経済や外交、人的交流を強めていくことが求められているのではないでしょうか。

開幕まで460日を切った大阪・関西万博については、開催目標の明確化、開催経費の無駄の削減が求められています。ＩＲに関しては、大阪府・市民をはじめとした多くの人びとが抱く疑問や不安に対する丁寧な説明と対話が不可欠です。

部落問題に関する今年の重点課題は、最高裁であらそわれている鳥取ループ・示現舎裁判での勝訴です。具体的には、高裁段階で認められた「差別されない権利」を最高裁でも認められること、差し止めが認められなかった県でも差し止めが認められることです。

また、寺尾判決から50年目を迎えている、狭山第3次再審闘争が山場を迎えていますが、何としても東京高裁で事実調べがおこなわれ再審が開始される展望を切り開くことです。さらに、近年悪質化してきている差別と人権侵害に対して効果的に対応できる人権委員会の設置、包括的差別禁止法の制定にむけた機運を大きく盛り上げることです。

住吉地区での今年の重点課題の一点目は、沖縄県読谷村の金城実さん宅に保管されているオガリ像の設置を実現することです、二点目は、3年目を迎えている子ども第三のいばしょ事業を、2025年度以降も継続していける道筋をつけることです、三点目は、住吉連合地域活動協議会と連携し、市民交流センターすみよし北跡地（2,289 ㎡／694坪）の有効活用に向けた議論を本格化していくことです。

住吉隣保事業推進センター（すみよし隣保館　寿）は、2016年4月に、民設置民営の隣保館として開設されました。今年の4月で9年目を迎えることになります。この間、総合相談を軸に、さまざまな事業や活動の拠点として住吉地区住民をはじめとした多くの人びとによって利用されてきています。この8年間をふりかえったとき、最大の問題は、財政面で持続可能な状況が確立されていないという問題です。この問題を解決するカギは、すみよし隣保館　寿で実施している隣保事業部分に関して国や大阪市からの助成を実現することです。このため、

厚生労働省や大阪市・住吉区役所、部落解放同盟中央本部や全国隣保館連絡協議会などへの要請を積み重ねてきていますが、本年は、一歩でも実現に向けて前進させたいと決意しています。

来年2025年には、住吉隣保事業推進センター開設10周年、再来年の2026年には、部落解放同盟大阪府連合会住吉支部結成70周年、住吉支部初代支部長で財団法人住吉隣保館の初代理事長・館長であった住田利雄さんの没後40年を迎えます。これらの記念すべき節目の年に、これまで述べてきました諸課題が成功裏に達成されているように、みなさまのご支援をお願いし、新春を迎えたごあいさつといたします。

2024年1月11日

公益財団法人住吉隣保事業推進協会

理事長　友永　健三

第31回　住吉・住之江じんけんのつどい　第2部講演

『多民族共生のまちづくりをめざして～「民族保育」の視点から』

講師：森本宮仁子さん

（社福）聖和共働福祉会事務局長、NPO法人IKUNO・多文化ふらっと（共同）代表理事

こんにちは。ご紹介いただきました森本と申します。中川五郎さんの歌を聴かせていただいて、もう今日は十分だと思っていますが、1時間ほどですが、お話にお付き合いいただけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

自己紹介

まずは、自分の自己紹介をしたいと思います。わたしは、保育士養成校と言われている聖和大学を卒業しました。卒業後、大阪市生野区にある社会福祉法人　聖和共働福祉会大阪聖和保育園に就職し、その後、主任保育士、施設長を経て、現在事務局長をしています。その間に大阪市立大学、現・大阪公立大学の大学院で学びました。いまは、保育士養成校で非常勤講師もさせていただいています。2020年からNPO法人 IKUNO・多文化ふらっとの代表理事をさせていただいています。

生野区について

生野区は、大阪市の地図の南側の割と東側にあります。大阪市生野区のことを簡単に紹介します。住民基本台帳から見ると人口12万5,700人といわれています。そのうち外国籍住民が27,355人ということで、外国籍住民が22％です。5人に1人が在住外国人といわれているまちです。そのなかで一番多いのが韓国朝鮮の人たちです。続いてベトナム、中国、ネパール、フィリピンということで、なんと60カ国以上の人が、いま現在暮らしています。

大阪聖和保育園について

わたしが勤めている保育園の話をさせていただきます。大阪聖和保育園は、生野区の桃谷にあります。ゼロ歳児、産休あけから就学前までということで定員120人の園です。保育時間は朝7時から午後9時までしています。夜に仕事があるという要望があり一時は10時まで、たまには夜中の12時とか 1時までお預かりしたこともあります。ここ最近は、新型コロナウイルス感染症のことがあって利用者が減りました。いま、夜を利用するお子さんがいなくなったので、来年度からは午後7時までということで保育時間を変更することにしています。また、必要になれば延ばそうと思っています。

子育て支援多機能センターということで、<いくのパーク>の 3階で、一時保育、休日保育、つどいの広場事業をやっています。休日もやっているので、保育所の休みは年間2日だけです。8/15 の前後、1/1 だけが休み、あとは全部あいているという保育所です。つどいの広場は、親子で遊びに来るものになっています。

そこにいる子どもたちは、2023年度127人の子どもたちがいます。そのうちの 70 % が在日韓国朝鮮人の方々です。生野区のなかでも韓国朝鮮人の方々の集住地域となっています。実は、この子どもたち、3世、4世、5世ということになっていて、言葉なんですが、日常の言語は日本語がほとんどです。母語は日本語、母国語は、韓国語です。本名で来ている子はさて何人でしょうか。127人のうちの 80人ぐらいが在日の子ですが、本名できている子は10 %。ほとんどの子が通名できています。キムさんは金本さん、金田さん、山田さんになっていたり、日本のような名前になっていたりする。そのことはまた後でふれます。その他、中国、フィリピン、ネパール、ガーナ、エチオピア、南アフリカ、フランスに国籍、またはルーツを持つ子どもたちが通っています。

大切にしていることということで、目標標語は、「自分をたいせつにします。人をたいせつにします。豊かな仲間づくりを目指します」というかたちで進めています。保育の概要は、遊びを中心にした保育。一人ひとりを生かしあう共生保育。異年齢の子どもたちが育ちあうための縦割り保育。日本人、韓国朝鮮人が共に育ちあう民族保育。さまざまな国籍の子どもたちが、共に育ちあうための多民族保育。親と子が共に育ちあうための子育て支援。これがわたしたちの保育となっています。

クラスは、先ほどから民族保育や多民族保育という言葉がでていますが、縦割りにしていて、クラス名は、韓国語にしています。マウムホーム、ヨンギホーム、ソーマンホーム、ピョンファホーム、チャユホーム、サランホームというかたちで、ホーム・縦割りの部屋の名前は韓国語にしています。先ほどから言うように在日の方が多いのがうちの保育園だからです。

遊びを中心とした保育ということで、子どもたちは遊んでいますが、縦割り保育で小さな子どもたちと出会ってもらっています。共生保育ということで、障害をもった子どもたちもたくさんいます。

民族保育

今日は民族保育ということについて少し話しながら、どんなふうに多民族共生のまちづくりをしたいかをお話に続けたいと思います。

民族保育と書きました。特別なことをやっているわけではなくて、通常の保育のなかで、韓国朝鮮にまつわることをいろいろやっています。韓国朝鮮語であいさつをするとか歌をうたうとか、物語を聞く、手遊びをする、遊びをするとか、体操する。それから楽器演奏ですね。チャンゴやソゴを演奏する。ままごとの着替えセットに、チマチョゴリやパジチョゴリがある。ホームの名前が韓国朝鮮語になっている。韓国朝鮮のメニューが給食に出る。ビビンバやトック、チャ

プチェ。おやつにチヂミが出たり、そんなふうになっています。民族保育月間がある。書いてしまえば、これだけのことです。

民族保育をなぜはじめたか

わたしが就職するまで保育園は、普通の日本の保育をしていました。わたしは就職した１年目は、3歳児の33人を先輩の先生と担当しました。33人のうちほとんどは、韓国朝鮮にルーツや国籍のある子どもたちが同じく 70 ％ 、80 ％ いました。この子は日本人かなと思う子が数えるほどでした。そのなかでやっぱり本名で来ている子は、3人か 4人でした。だけど、そんななかで保育を展開していると、日本の手遊びをして、日本の歌を歌って、日本語で保育をする。ちょっとまてよ、これって韓国朝鮮の人たちがいっぱいいるよな……。わたしは、大学出たて、１年目です。わたしはぜひ、韓国朝鮮語のなにかを保育に入れたいと思っていたので、歌を入れることにしました。１つ上の先輩に、歌を歌いたいと言うと、いいんじゃないといってくれたので歌を歌うことにしました。歌は、本名で来ている子のオモニ、お母さんに教えてもらいました。サントッキという歌でした。山うさぎが飛んでいるよという歌です。サントッキ トッキヤ オディル カヌニャ カンチュンカンチュン トゥィミョンソ オディロ カヌニャ これだけです。3歳の子どもたちに歌をというときは、サントッキはこうでね、オディル カヌニャはこういう意味でねなんて言わないでも、すぐについてきてくれる。「歌うわな、先生」って言って歌って、2回目に「わかるとこ、続いてな」と言うとすぐに歌ってくれるんですね。元気に覚えて歌ってくれました。元気に歌ってくれたなぁと思って、「じゃぁ今日はこれで保育園はおしまい、お迎え来たら帰ろうね」と終わりました。わたしは一抹の不安を感じていました。子どもたちはきっと家で歌うよな。きっと「こと」が起こるよなと思いました。今から 40年前のことです。これ、明日、来るよなと思いながら翌日を迎えました。わたしは、来ると想定していた、思っていた人と違う人が来て驚きました。でも、やっぱり走ってきました。在日のお父さんが血相変えて保育園にやってきた。わたしの顔見て言いました。「先生、何やってくれとんじゃ!」って怒鳴られました。「ワシらがどんな思いでここにいてるかわかってんのか!」って怒鳴られました。わたしは想定外でした。怒鳴られると思って覚悟していましたが、それはわたしのなかでは日本人の親に怒られると思っていたんです。「先生、ここは日本の保育園よ、なんの歌うたってくれたんかな」というのがくるやろな、そんなときはよし言うぞと思っていました。でも、来たのは在日のお父ちゃんが血相変えてきました。何が起こったのか、わたしは二十歳過ぎの小娘ですからわからなかった。ええことしたのにと思っていたのに、何が起こったのか分からなかった。「え?韓国朝鮮の子がたくさんいるから歌うたったのに、何が悪いの」と。いま思えば、若気の至りです。そのお父さんのその言葉を聞いて、本当にボディブローでした。どれだけ差別がひどかったのか、どれだけこのお父ちゃんがつらい思いをしてきたのかということに思い至らなかったことにショックでした。いいことしている日本人なんてありえないって。日本が何をしてきたのか。このお父さんがなぜ通名を使っているのか。そうでないと生きていけないという日本があったんやんな。そのことをこのお父さんは正直にわたしにぶつけてくれたんやんなって。そのときはそんなん思っていませんでした。そのあとあと、ボディブローがしみてわかった。そのときは「なんで、お父ちゃん、ええことしてるやん」と思っていました。でもその後、他のお母さんが来たんですね。それも想定外。在日の通名使っているお母ちゃんでした。今度はニコニコしてきたんですね。また怒られると思っているわたしに、このお母さんこう言うねん、「先生なにやってくれて……」やっぱり同じやんと

思っていたら、「家帰ってから大変やったんやから」と続きます。何が起こったのかと思えば、その家にはハルモニ、おばあちゃんがいて、孫が歌った歌を聞いてハルモニが、「いま、何言うた？」って聞いて、孫が歌った。それをハルモニが聞いて、手をたたいて喜んだ。それで「サントッキか。もう一回歌え」と言われた。「この子、何度歌わされたか」っていう話でした。在日のハルモニ、おばあちゃんが、孫が歌う姿に喜んでくれたということでした。両方の話を聞いて、想定していた日本人からの話はないというのがこのサントッキを歌う、民族保育をはじめた翌日のできごとでした。

そのとき、このアボジ、お父さんに怒られたことは、ボディブローでしたが、そういうことなんやなと思いました。わたしは、日本人として、加害の位置にある。その加害の位置にある人はこんなふうに怒鳴られるのは当たり前やったんやな。このことをやっていくには怒鳴られ続ける覚悟をしていかなあかんということなんやなと考えさせてくれたということでした。とっても感謝しています。

そのお父さんのこと、後日談として話しておきます。孫までうちの保育園に入れてくれます。「先生、頑張りや」と言ってくれています。でも、このお父さんたち、在日の人たちが受けてきた差別は、それだけひどかったんだなということをわたしに教えてくれたそんなできごとでした。

それから園内でそんな話を共有していくんですが、当時の園長も含めて、「それは大事なことやから園でやっていこう」、そんなふうに決めて、サントッキからあいさつをするとか、物語を聞くとかいうふうに発展してきた。それが、わたしたちがやってきた民族保育です。

これは、子どもたちがプックという楽器をたたいて遊んでいるのと、チマチョゴリのお着替えをして遊んでいるところの写真（右2枚）です。民族保育月間で、先生たちが楽器や踊りをいろいろと練習します。子どもたちに練習はないんですが、先生たちは練習して、年に1度、子どもたちに見てもらいます。おとなたちが韓国朝鮮の文化を学んで伝えていくということをしています。

これをやるに際して、毎年、民族保育をはじめるにあたって、何を大事にしていくのかを職員で話し合っています。職員会議と言うより、お菓子を食べながら、お茶を飲みながら「今年の民族保育どうする、どう思ってるの」と話をするんですね。そんななかで、うちの職員、正規職員と常勤アルバイトを含めて30人ぐらいいるんですが、その職員が10人ずつぐらいのグループにわかれてどうするか話し合います。30人のうち10人ぐらいが在日の人たちです。本国出身の人もいれば、在日として生きている、日本国籍を帰化して取った人もいれば、在日のまま、国籍が韓国籍の人も朝鮮籍の人もいます。そんななかで日本人も一緒にどうするのというはなしをするんですが、みんな素直にやってくれます。

在日の職員からは、「チョゴリを着て演奏するやん。そのときにいい加減に着やんといて欲しい。わたしら、チョゴリなかなか着られへんかってんやんか。それを日本人の職員がいい加減に着るのを見るのは、わたしは嫌や」、そんなふうに言ってくれる職員もいる。と思えば、「気軽に着てくれて、一緒に考えてくれる方がいい」という職員もいる。一方で、日本人の方も

「わたしがチョゴリ着ていいん？ 嫌な気、せえへんのん？」と聞く職員もいる。「でも綺麗やから着させてほしいねん」という職員もいる。お互いに、言ってはいけないことはない。あなたが思ったことを出したらいいというそんな場を設定しています。ですので毎回、この会議は、泣いたり笑ったり大変なんですが、そのなかでお互いを認めていくそんな場をつくっています。共有しながら、こんなふうにして作品を子どもたちに見てもらいます。

この写真の左側は、コロナが非常に流行っていた時期で、子どもたちはテラスで座って見ていて、職員は園庭で踊りました。衣装からマスクまで全部黄色にそろえて踊りました。右側は、サムノリで部屋のなかでみてもらいました。こんなふうに見てもらいながら民族保育を続けています。

“民族保育”が目指すもの

わたしたちが目指しているのは、韓国朝鮮人の子どもたちが自国の出身であることに自身や誇りを持ってほしい。日本人の子どもたちが韓国朝鮮人の子どもたちを仲間だと実感してほしい。韓国朝鮮人と日本人の子どもたちが共に生きていく力を身につけて欲しい。そんな思いで、この民族保育をしています。ですので、民族保育は何か。多文化共生としての民族保育。民族教育としての民族保育。人権保育としての民族保育だと思っています。

多民族共生

表題で、多民族共生と書いているのを多文化共生とまちがっているのではないかと思われた方もいるかもしれません。わたしたちがこだわっているのは、文化を継承したいわけではない。あなたがかけがいのない命なのだ。あなたは、そこにいる、とても大事な命なのだということを伝えたい。なので人がテーマ。そのために文化を使わせていただいている。大事にしたいものは文化ではない。あなたが大事。あなたがかけがいのないということをわかってほしい。そのことをお互いに分かって欲しいということで、こんなふうにしています。

それは何か。戻りますが、在日韓国朝鮮人の人たちが 70 ％ いますと言いました。なぜ日本に韓国朝鮮の人たちがいるのか。先ほどの中川さんの歌も関東大震災のことで朝鮮人が虐殺されたということでみなさんもすでにご存じですが。1910年の朝鮮半島の植民地化からはじまっています。その前から実ははじまっていますけども。朝鮮半島の人たちはこの近代史のなかで、日本にふりまわされてこられました。朝鮮半島は一つで、朝鮮人だった。なのに、こんなふうにして植民地化したので、日本人に一旦なっている。この日本人になった時点で、強制連行もあれば、創氏改名、農地改革もあればということで自分の場所を奪われていく。それで日本に入ってきた人たちがたくさんいる。帰ろうにも帰る場所がなくなっていく人たちがたくさんいた。そんななかで1945年の敗戦、韓国朝鮮半島は解放を迎えます。そして二分されていく。そんなふうに韓国朝鮮の人たちは日本と歴史を歩んできた。いま、在日韓国朝鮮人の人たちにあるものは、住民税、所得税、固定資産税いろんな税金は、みんなお払いいただいています。でもないのは、選挙権、校長、教頭、警察官と書きましたけれども、国籍条項による就職できないものです。卒園式のときに、年長児が大きくなったら何になりたいという絵を描いたりします。お花屋さんになりたい、ケーキ屋さんになりたい。そして、必ずあるのが消防士や警察官。それ見るたびにたまらなくなる。消防士になりたいという子の名前をみると在日の子なんですね。「ごめん、あなたね、大きくなって気がつくけれど、なれないんだよ」って思います。なんで消防士になれないのか。行政権の執行というのを負うものはなれない。行政権の執行とは何かとみてみる

と、家が燃えました。消します、隣の家はまだ燃えていません。その家から連なっている家がある。このままだと火がうつって大火になるので、まだ燃えていない家をつぶします。これを決めることが行政権ということだそうです。この行政権を行使するのは日本国籍を持っている者でないとダメだということだそうです。火を消すだけでなく、そういうことをするのは日本国籍を持っている人。だから警察官も日本人しかなれない。

学校の先生も今日、たくさん来てくれていますが、教員にはなれる。けれども、教頭、校長にはなれない、管理職にはなれない。そんなふうにして、なれないものがある。6歳で持った夢は儚く消えていくんですね。4世、5世になっている子どもたち、もう日本でしか生きていくしかないという子どもたちですが、なれないものが山ほどある。

また、そんな社会をつくっている側でみてみると、通名で生きるということ。日本で生きにくいという、就職差別もあるというなかで、生きにくいから通名で生きる。当初、歌を歌ったときに怒鳴ってきたお父ちゃんもできるだけ差別にあいたくない。そりゃそうですよね。関東大震災で殺されていくということになる。殺されていく側とわたしは殺す側に立っているんですけども、そのなかで、できるだけ殺されないでいるためには、自分のことを隠すしかないということになっている。それが通名。講演なんかによく行きますが、そこでも「たぶんあなたの横に通名の韓国朝鮮の人がいるだろう」と言っています。すぐあなたの横にいるんだと。これもわたしの友人から聞くんですが、通名でずっと育ってきた。あるとき、16歳ごろ、親に宣告される。「実はあんた韓国人やねん」と。そうなんやこの名前はなんか変やんなとか、家でやっている法事が友だちの家とは何となく違う、出てくる食事が何となく違うと思っていたけど、そうやったんやと。自分は韓国人やと知り、自分の本名はこうやと聞かされる。「そうなんや」とわかる。そのことを抱えて思春期、高校に通い、わたしって本当は韓国人やねんと胸に秘めて過ごす。仲の良い友だちと、楽しくやっているけど、「実は、わたし韓国人やねん」と心に思っている。隣の子はわたしのこと、日本人やと思っているんやろうなと思っている。そんなふうにわたしは、この子に嘘をついているんやと思いながら日常生活を送っている。そんなある日、この子にだけは言おうと覚悟してカミングアウトするんだと聞きました。ある日、いつも仲良くしている友だちに「ちょっと話あるんやんか」、「どうしたん？何でもいいよ、言っていいよ」、「わたし、ほんまはな…」これで友人なくすかもと思いながら、ドキドキしながらカミングアウトする。「実は、わたし韓国人なんやんか」と言うと、友だちの反応は「大丈夫、大丈夫。全然気にしないよ」と。そしてその言葉を聞くたびにつらくなる。「全然気にしてない、大丈夫、大丈夫」と。日本人側からしてみれば、「あなたが韓国人であっても大丈夫、何の問題もない」というつもりなんだろうけども、この子にとっては、どれだけの思いを持って言ったのかということを、「全然、大丈夫」と言われる。「わたしとあなたは前から友だちだから、大丈夫」って。本当にわたしの傷みをわかってくれるんかなって。「大丈夫、大丈夫」っていうことは、本当は大丈夫じゃないっていうことじゃない、わたしは特別に大丈夫って言っているんじゃない？となる。覚悟して言ったのに、覚悟をなんとなく覚悟でないもの、たいしたものでないもののように言われる。わたしが生きていくことは、たいしたことなんやんか、そのことをわかってほしいんやんかっていうことになるんだと聞きました。

わたしもやっていたな「大丈夫、大丈夫。全然問題ないよ」って。ほんまやったら、問題やって言っているようなもんやんか。そうじゃなかったんやろうな。「よう言うてくれて、ありがとう。たまらんかったんちゃう」って言ってほしかったんやろうな。

日韓保育交流のこと

わたしたち6法人ぐらいと韓国のソウルと光州の保育所と交流をしています。1年に1回、韓国の保育を体験します。翌年韓国から10日間ぐらい来る。それをくり返して、今年で 30周年を迎えました。30年間行ったり来たりしています。その日韓保育交流というところに、在日の保育士に行ってもらいました。うちの一人の職員に光州に研修に出てもらいました。その職員は、在日の1.5世です。本名で生活している、そんな職員です。10 日間研修に行きますが、最後の3日間ぐらい、わたしは園長として評価会に行きます。最後3 日目ぐらいに到着して、研修生と合流する。研修がどうだったかということを翌日します。この職員のときも行きました。たいがいは、みんな元気な返事が返ってきます。ところが、このときは大丈夫ではなかった。夜に会いました。晩ご飯を一緒に食べようということで、晩ご飯の会場に入っていました。研修生も入ってきました。そして、わたしの顔をみるなり、血相を変えて言ってきました。「先生、わたしは何人ですか」って泣くんです。びっくりして、「どうしたん？」と聞くと、「わたしは一体何人なん」と言うんです。涙ながらにこんな話をしてくれました。それを文章に書いてくれているものがあるのでちょっと読みます。

『「わたしは、在日韓国人やねん」と友だちに言えるようになったのは数年前からの韓流ブームと大阪聖和保育園に勤めはじめた7年前ごろからでした。そんなわたしが、今回、日韓保育交流で韓国に行くと決まって、不安な思いがありました。過去に日韓保育交流に出かけた先生からは、「行ったら勉強になるよ。韓国の先生からたくさん愛をもらっておいで」とプラスの励ましをいただいていましたが、不安は消えることなく出発を迎えました。日本にルーツを持つ他の保育園の研修生、保育士との共同生活。韓国にルーツを持っている韓国の保育教師との出会いのなかでわたしが抱えていた不安は中途半端で自信のない自分との直面ということでした。

研修先の保育園で名前は韓国名だけどイルヴォンソンセンニム、日本の先生と呼ばれ、「違います」と伝えたいけれど精一杯覚えた韓国語はたどたどしく、ハングル・韓国語を読めないわたしは、ソンセンニムから見て日本の先生に見られてもおかしくないのでした。そのことに悲しい思いを持っているのですが、研修生からは「韓国語が話せるからいいね」と言われました。「伝わってないことの方が多いよ」と言うわたしの言葉より名前がクローズアップされ、心のなかが伝わらない気がしていました。

観光で訪れたモッポ市の近代歴史館は、日本が侵略したときの写真を展示している施設では、日韓の歴史的な背景を知ることになりました。そのことについてソンセンニムと話をするのですが、過去を受け止め前を向いているソンセンニムと過去にとらわれている自分を比べてしまい、わたしは一体どこの国の人間なんだろうと、どう感じてもいいのかわからない孤独感が心をいっぱいにしていきました。もちろん研修生たちやソンセンニムが悪いわけでもなく、わたしに冷たい対応したわけではありません。研修修了が目前となった 2週間目の終わりに大阪聖和保育園の園長先生や主任の先生が激励団として韓国に来たときには、涙があふれ、止まりませんでした。いまあのときどうしてあんなにも泣いたのかを考えてみると、この中途半端なわたしのことを理解してくれている先生たちに再会した安心感だったと思います。

在日韓国朝鮮人のことを理解しようとしてくれている職場で守られていることを知りました。帰国する前日ソンセンニムから、「わたしは在日ではないのであなたと同じ気持ちではない。でも、『わたしがどこの国の人間かわからない』と言ったでしょ。あなたは胸が痛かったと思うと言って抱きしめ泣いてくれたと

き、とてもうれしかった。またそのしんどさは、あなただけの問題ではないよ。愛しています」とメッセージをもらい、帰国しました。

帰国してからは日常がかえってきました。でも出発前の自分とは明らかに違うと感じています。わたしのなかで在日韓国人であるわたしを無自覚なままに受け止めることができないことが大きかったのだと思います。しかし一緒に行った研修生の仲間や韓国でも研修園のソンセンニムに気持ちを受け取ってもらえたことで、パワーをもらい、肩の荷が少し下ろせたようですっきりしています。』こんなふうに書いているんですけれども。

日本では、あなたは韓国人だ。日本人ではない。だからなれない職業があって当然なんだ。ヘイトスピーチはダメだということになりましたが、どこからかともなく聞こえる「そんなに嫌なら帰りなさい」そんなふうに言われている、犯罪を起こしたら帰らなあかん、自分の帰る場所がない、韓国にわたしは行かなあかんという韓国という名前を日本のなかで生きている彼女。韓国本国に行くと、「あなたは日本の先生。だって韓国語しゃべれないでしょ」と言われる。一体わたしは、何人なの。いま、日本と韓国はそれなりにいい関係を取っているのかもしれない。そんなときには、韓国でも在日の人がいるっていう話は、あまり学習にのってこないんだそうです。なので韓国の人たちも在日の韓国人がいるということを知らない人がいる。日本のなかでは韓国人と言われる。そんななかで韓国、韓流ブームもそうですけれども韓国本国には憧れる人がたくさんいるかもしれない。でも在日の人は置き去りになっているんですね。これは日本がやってきた近代の歴史そのなかで、わたしは何人なの。就職差別もあり、まだまだ韓国人としてこの日本で生きていけない、そんな人たちが、いま、わたしの横にまるで日本人のようにしてあなたの隣にいるんだ。そのことをどんなふうに考えていくのということを、この職員はわたしにもちゃんと突きつけてくれたのかなと思っています。

多民族保育

いま、新たに60カ国の人たちが生野区にはいるというふうにお伝えしました。そんななかでもうちの園にもたくさんのいろんな国の子どもたちがいます。そのことを捉えて多民族保育というふうに呼んでいます。民族保育は韓国朝鮮、多民族は他の国の人たちのことをあわせて。

いまは、こんなふうにしています。うちにいる子どもたちの母語や母国語を集めて、あいさつしています。子どもたちの朝のあいさつものすごく長いです。「はい、大阪聖和保育園のみなさん、おはようございます。アニョハセヨ、ザオシャンハオ、マダンガンウマガ、シンチャオ、マーチン、ナマステ、サラーム、ヘロー、ボンジュール、シャローム」ってこうやるんですね。うちにいてる子たち、これ、毎年子どもたちによってあいさつが増えたり減ったりします。

ゼロ歳の部屋でもこんなふうにやるんです。ゼロ歳ですから 3人とか 4人でおやつ食べたりするんですけど、おやつというか朝の集まりをやったりするんですが、そのときにたまたま日本人と韓国人で一人だけ中国の子がいた。10カ月ぐらいになってるその子に先生があいさつするんですね。マウムホームのみなさん、おはようございます。アニョハセヨは韓国の子どもたちにむかって、アニョハセヨ。中国の子が一人だけ、その子にむかってザオシャンハオって言うんですね。そんなふうにしてたら、子どもたちもわかって、ザオシャンハオのときだけはこのゼロ歳の子にむかって、こうやって顔をむけるんですね。先生がむけるからね。他の子たちもザオシャンハオってその子に顔をむけるんです。そうするとこのザオシャンハオって言われた中国の子は『うん』って言うんですね。「わたしの言葉」をゼロ歳が覚えていく。「わたしの言葉」をここでもらった。そんなふうになっています。

言葉を奪ってきた、あいさつを奪ってきたので、あいさつは奪わない、言葉も奪わない、名前も奪わない。そんな思いをして保育に取り組んでいます。

課題ですね。さまざまな課題がわたしたちの周りにはあるんですけれども、この課題の克服のためにということで、少数者・マイノリティの課題がたくさんある。その課題はマジョリティ・多数者の課題として認識できなければ解決できないとわたしは思っています。ある部分でわたしは、少数者。でもある部分ではわたしは、マジョリティ。少数者である方も違うところに立てば多数者かもしれない。わたしは自分の被害もあるけれども、加害に目をむけられるかということが非常に大きいというふうに思っています。

IKUNO・多文化ふらっと

そんなことのなかで地域の仲間とともにということで、今日パンフレットを渡させていただきましたけれども、IKUNO・多文化ふらっとというＮＰＯを立ち上げました。誰もが暮らしやすい全国ナンバーワンのグローバルタウンをつくるということで<いくのパーク>ということで挑戦をしています。聖和保育園の成り立ちと同じですけども生野区のどこかなという話です。そのなかの右側です。生野区をもうちょっと拡大して、桃谷というところ、わたしの園のすぐ歩いて2分ぐらいのここにある場所なんですがもと御幸森小学校という小学校です。

生野区はすごい少子化が進んでいて19の小学校があるんですが、それのうちの生野区西部の地域に 12 の小学校がある。その12の小学校も単学級にも過ぎるぐらいの単学級なんです。一番ひどかった御幸森の少子化のときは1学年6人でした。6人で運動会するか、修学旅行行くかという話なんです。なので生野区12の小学校を4まで減らす。5の中学校を4まで減らすということで、この小学校の跡地を活用するということになったんです。この跡地、本来なら大阪市は売り飛ばすのがやり方なんですが、生野区は住宅が密集している。それと5人に1 人が外国人と言いましたが 5軒に 1軒、空き家なんですね。そんなところになっているので発災があったときに危険だということで避難所として残すということになった。その跡地を活用するということになっているんですね。この跡地の活用ということにプロポーザルがあったのでわたしたちはそこに手を挙げて受託をすることになります。

背景は同じことです。在住外国人ですね。全国の地域のなかで上位3カ国がということでこれちょっと比較で出したんですが2006年まで韓国朝鮮の人がトップでした。ところが2021年、韓国の人たちは第3位まで減っています。60万いた人が、いま 40万です。なぜでしょう。一つは高齢で亡くなった方。それと生きにくいので帰化した人がいっぱいいる。日本人との国際結婚で、いまの日本で暮らすうえで、損な韓国籍より日本籍を取っていくということで、どんどん減っている。比べて逆に増えてきたのが、中国やベトナムの人たちというふうになっています。

これまたおかしいんですけど<いくのパーク>ができた背景、区政に関する区民アンケートということで2021年に、生野区を住みたいと感じる魅力あるまちだと思うか思わないかという調査をしたんですね。それの回答がおもしろい。住みやすい魅力のあるまちだと思うの第2位が外国人とうまく共存している、韓国朝鮮の人たちとのうまい共生の歴史ということが一方にあり、思わないの方の3位が、外国人が多いのが不安。これ、両方出ているんですね。わたしたちはこの「思わない」を軽減して、減らす。「思う」ということを上げていきたい、こんな狙いもあります。外国人が住んでいる住民比率は大阪市生野区がトップです。5人に1 人ですもんね。もう一つ、就学援助率の比較ということで全国平均はだいたい就学援助率15 ％ なんですが生野区は30 ％ 。全国平均の 2倍の貧困率です。そういうこともあってみんな

で生きていけるそんな場所をつくりたいというふうに思ったので、大阪市生野区における多文化共生のまちづくりの拠点を通じて、誰もが暮らしやすい全国ナンバーワンのグローバルタウンをつくる。これをわたしたちのミッションに掲げて、ここの場所跡地の活用を始めました。

スキームについては、パンフレットに書いています。わたしたち多文化ふらっとはＮＰＯなので、株式会社リタウンさんという食の会社と一緒にやっています。通常こんな跡地活用は、大阪市がお金を出してくれて運営するということがよくあるんですが、全部事業所に決まったところが行います。

また、小学校はすごく建物が優遇されていると知りました。わたしの保育所は、3階に入ったんですね。そしたら「保育所なので防火設備に変えてください」と言われました。「保育所は防火設備って、ここ学校ですよね。学校跡地だからこのままでいいんじゃないですか」って言ったら、「ダメです」って言うんです。「どういうことですか」と尋ねると「防火扉をつけて全部やり直せ」って言うんですね。「小学校はいけてるのに保育所はあかんの？」「保育所はダメです。全部壁にして鉄の扉をつける保育所にしろ」と言うんですね。ちょっと待って、これどうするのと思いました。結局やりました。防火シャッターを最大限つけました。これだけで何百万円。防火シャッターを2つ、その内側なら窓つけて、扉つけてもいいってこう言うんですね。学校中がそうなってるんです。飲食店をつくろうと思ったらそうだし、ガラス扉のところも全部防火扉に変えてくださいと言われました。学校であれば大丈夫だけれど、通常の多目的施設になると全部防火施設にやりかえてくださいと。この改装費に1億4,000万円を投じました。リタウンさんと半分ずつやらないといけない。7,000万円かかりました。補助金を活用したり、理事も全部寄付金で放出しました。あとは借金しています。こんなふうにしてやってるんですね。

みなさんまた寄付金もお願いをしていますので見ていただいたらと思います。

そんなことをやりながらでも何をしたいのかというと、多文化多民族共生のまちづくりをやりたいというのがわたしたちの目的、願いです。それは、パンフレットにありますけれども、いくのコーライブスパークという名前を付けました。略して<いくのパーク>、もっと略していくパーと呼んでいます。共に生きていく尊厳を持つ人である、開かれた場所であるというような名前で<いくのパーク>という名前にしています。そのなかでさまざまセクターと連動しながらやっていきたい。まず、防災非難所になる。それから多世代・多文化の新しい学びをしたい。それから地域コミュニティづくりにむけてさまざまな活動をしています。具体的には、パンフレットに整理しています。いくのパーク事業、こどもみらい事業、まちづくり事業、ちょうさ・ていげん事業ということになっています。

写真を見ていただいたらと思いますが、農園（右上写真）をみんなでつくったり、子ども食堂（右中写真）もやったりしています。また、学習サポート教室DO-YA（右下写真）というんですが、日本語を母語で持っていない子どもたち、小学校から高校生まで約80人のうち半分ぐらいが日本語を母語で持っていない子どもたち。

その子たちにほぼマンツーマンで、大学生および社会人に来ていただいています。有償ボランティアとして来ていただいています。子どもたちは、自分のことは自分で決める。おとなたちは、おとなが決めたことを子どもにやらせないということで、自分で選んでもらっています。そんななか、いろんな話をするなかで、生活の苦難であるとか、自分に何が起こったか、しゃべっていく。そのまた続きで勉強をみたりしています。勉強だけをする場所というよりは、あなたの生活、あなたの家族も含めて考えていきたい。そんな思いでやっています。

また、多文化キャンプ（右写真）ということで、いろんな人と出会ってもらう。ふくろうの森という図書室も開設しています。いろんな国の絵本も置いています。また、クロッシングフェスということで、年に1回、いろんな国の人たち、いろんな地域の人たちに舞台に立っていただいています。この写真は、高校生のK-POPダンスを後ろから撮ったところ（右写真）。上手なんですね。プロ顔負けの踊りをしてくれます。まわりは多国籍の屋台が出る。いろんな国のもの、食べ物で、異文化を楽しんでいただくというふうになっています。

また、「いろんなことば&いろんなえほん de いくのっこパーク」ということで、大阪わかば高校の学生さんたちと、生野区内にある保育所の子育て支援施設とのコラボもやっています。わかば高校の学生さんたちが、自分の母語であいさつのプラカードを持って立っていてくださっているオープニングとエンディングの写真です。わかば高校は、小学校、中学校のとき、保育所のときも含めですけども、本国から日本にやってきた学生たちが入っている府立高校です。そこの学生さんたちなので、日本語が母語ではない。この日本語教育というようなことのなかで、絵本を日本語に訳すという授業をしていて、逆に言うと、この絵本を母国語で読むということをやってもらっています。生野区にいる子育て世帯、いろんな多国籍の子どもたちの親子に来ていただいています。子どもたちにしたら、親にしたら、高校になったときに、我が子がどんなふうになるのかということを、モデルにしてもらう、そんな働きもあります。また、高校生たちの活躍の場所ということになっています。この写真は、去年の図柄なんですけれども、子どもたちですね。これ、読んでもらっている親の姿。わたしの母国語を子どもに見てもらっている。他に子育て支援ということをやっていますので、絵本の広場である、ままごとの広場とか、ピアノで読み聞かせしたり、新聞プールで遊んだり、そんなことをしています。

2020年度、約300人の子どもたちが来てくださったんですが、とても良かったと言ってくださっています。子どもが楽しめる場所になって良かったとか、わかば高校の生徒さんが子どもを見る目がとても優しくていいなと思った。スタッフの方もですね、わかば高校の学生のみなさんが楽しそうに参加していて、読み聞かせの準備も工夫されてて良かった。わかば高校の生徒たちの活躍の場をつくって、将来保育士になってくれたらいいな、こんな感想もスタッフは持ちました。

また、わかば高校の学生さんもこんな感想です。「楽しかった。可愛いね。わたしはとてもうれしくて、子どもたちと交流をして、彼らにとてもうれしく思ってもらって、わたしはみんなのためにギターを演奏して、わたしはうまく演奏できませんでしたが、みんなの拍手をもらいました。11月3日はわたしが日本で初めてのボランティア活動です。今回は子どもに絵本を読み聞かせでした。この日のために前もっていろんな準備をしておきました。10月6日にわたしたちに絵本の読み聞かせの方法を教えるために、おばさんたちが学校に来ました。初めて絵本の読み聞かせをするので、恥ずかしくて緊張しました。いろんなテクニックが必要です。例えば大きな声で読むことや、本を読む途中に問題を出すことなどです。それは大事なことです。わたしたちも日本語の絵本を自分の言語に翻訳しました。正しい意味に翻訳するのは難しかったです。たくさん準備をしたので順調なはずだったのですが、実際やってみると思っていた以上に難しかったです。読み聞かせの日、子どもたちはまだ小さいから、集中できない子もたくさんいました。それだけではなく、他の本を読みたいと返事してくれない子もいました。だからボランティアが終わった後、保育士を尊敬しました。一人で何人かの子どもの世話をします。人それぞれだから、子どもの行動も予想しにくいし、いつも泣いている子どももいます。保育士は子どもの世話をするだけでなく、同時に知識を教えますから大変な仕事です。その日は忙しくて大変だったけど、みんなと一緒に同じことをしましたから、経験もあっておもしろかったです。」こんなふうに書いてくれています。授業はこんなふうに展開しましたということで、学校からいただきました。お互いに読み聞かせをしながら練習します。

わたしたちは、わかばプロボノプロジェクトというふうに呼んでいるんですけれども、学生一人ひとりの存在がかけがえのない命。その存在がさらに小さな子どもたちのモデルになる。地域における顔のわかる、知っている関係の創出。地域の構成員になる。生野区での活躍、大阪市での活躍、日本での活躍を期待したい。それはなにしろ、ともに生きていく仲間としてわたしたちと一緒に過ごして欲しいからだと思っています。

ふらっとがめざすものは、このふらっとが共生の砦でありたい。そんなふうに願っています。自分のままで大丈夫。あなたのままで大丈夫、そんなメッセージをこの場所がつくれたらいいな。だから、いいかっこしなくていい、わからないって言っていい、たまらなく日本での生活はつらいと言ってくれていい、あなたがいることの方が大事。あなたがそのままでいることが、かけがえのない、とっても大事なことなんだということをわたしたちが砦になりたい、そんなふうに思っています。

その砦のなかから次の展開をつくりたい。クロッシングフェスをする、多文化キャンプをする、DO-YAをする、絵本の読みきかせをする、それはこの<いくのパーク>で本気で混ぜたいと思っている。いろんな人がこの場で出会ってくれたらいいと思っています。いろんな人が出会う。

外では、日本人を装う、何もなかったように装う、そんなふうにしないといけない人たちが、あなたのままでいい、あなたのままでいいという人を受け入れていく人たちにたくさんこの場がつくっていければいい。

知らないと不安なんです。わからないと恐怖なんです。でも出会ってしまうと大丈夫なんですね。そんな出会いの場をつくりたい。本気で混ぜるそんなふうに思っています。なのでそれを実現できたら、その

次は個別の課題、社会の課題を克服する、人権を尊重する社会をつくりたいそんなふうに願っています。それは何しろ多数者の側が課題に気づく、自分の課題を克服しようとする、このことに尽きるとわたしは思っています。

再度書きました。少数者・マイノリティの課題、これは多数者・マジョリティの課題として認識できなければ解決しない。あなたは多分、被害者である。そのつらさを持ちながら、でも一方でひょっとしたら多数者じゃないですか。その多数者が自分のまわりにいる少数者の課題に気が付くとかができるか。ここからのスタートだと思います。

わたしの夢です。気が付けば多文化多民族共生ができている。あぁみんなここで出会ってみんなお互いそこにいてるっていうことをしてるやん。なんだ、出会わなかった人たちが出会う場があって気がついたらみんな一緒に共生してるやん。そんなんいいな、難しいこと言わんでもできたらいいな。気がつけば人を大切にする社会、それが実現できてるそんなことになればいいな。誰もが暮らしやすい多文化多民族の共生のまちに。

この写真、うちの卒園式のときの写真です。在日の先生だったのでチョゴリ着ているんですが、子どもたちもチョゴリ着ている子、着物を着ている子、ドレスを着ている子。違うということがいっぱいなんですね。日本社会、いま、できるかできないかを問われる。あるかないかを問われる。違うか違わないかを問われる。そうではなくて共に生きていく人は、生きているだけで価値がある。あなたはかけがえのない命をいま生きている。だから他の人もかけがえのない命を生きているんだ。一緒に誰もが暮らしやすい社会をつくる。そのことにこれからみなさんと一緒に歩んでいけ

たらいいかな、共生のまちづくりにこれからも一緒に歩んでくだされば ありがたい、うれしいなと思っています。

多民族共生のまちづくりを目指してということでお話を聞いていただきました。うまく話せなかったことがあるかもしれませんが、明日からまた共に生きるまちづくりということでみなさんと共に歩んでいけたらと願っています。

ご清聴いただきましてありがとうございました。

「人権のまちづくりを考える」すみよし連続講座
「差別されない権利」の実現をめざして
～「全国部落調査」復刻版出版事件裁判闘争から考える～

◆日時　2月10日(土)午前 10 時～12 時
◆報告者
①友永健三さん(住吉隣保事業推進協会理事長)
②齋藤直子さん(大阪教育大学地域連携・教育推進センター特任教授)
◆助言者　遠藤比呂通さん(弁護士)
◆参加費　500 円(賛助会員は 250 円)
◆申込・お問合せ：すみよし隣保館 寿まで

住吉部落史研究会
「わたしたちの狭山」
住吉地区におけるこれまでの取り組みをふりかえり、狭山の現状とこれからについて考える
【日時】３月９日(土)午前１０時～１２時
【報告者】
①川口隆男さん（部落解放同盟大阪府連合会住吉支部もと書記長）
②部落解放同盟大阪府連合会住吉支部執行部ほか
【参加費】５００円（賛助会員は２５０円）
【申込・お問合せ：すみよし隣保館 寿まで

住吉隣保事業推進協会のうごき

2024年 住吉地区新年互礼会

1月11日（木）午後6時半より、道頓堀ホテル（大阪市）において「2024年 住吉地区新年互礼会」が開催されました。国会議員、府議会議員、市会議員、住吉区・住之江区行政関係の方々、住吉連合地域活動協議会の方々、住吉・住之江区内の関係団体の方々、住吉・住之江区内の学校・ＰＴＡ関係の方々、住吉地区内関係団体の方々、各方面より多くの方に、ご参加いただきました。

はじめに、能登半島地震の犠牲者に対して、参加者一同で黙とうをおこないました。その後、主催者を代表して（公財）住吉隣保事業推進協会理事長友永健三よりあいさつをさせていただきました。

2023年をふりかえり、世界各地で起こっている戦争や、日本国内で起こっている自民党派閥の裏金問題、2025年開催予定の大阪・関西万博に関する課題などが述べられました。また、住吉地区においても、オガリ像の沖縄県読谷村での正式設置や子ども第三のいばしょ事業の継続、市民交流センター跡地活用などの課題が述べられました。これらの課題を解決するためにも、当財団への一層のご理解とご支援をお願いし、あいさつを締めくくりました。

理事長からのあいさつの後、来賓のみなさまよりごあいさつをいただきました。衆議院議員 佐藤さま、府議会議員 河崎さま、市会議員伊藤さま、上田さま、岸本さま、くぼたさま、中田さま、自由民主党住吉区支部 多賀谷さま、立憲民主党大阪府第三区 はぎはらさまの代理で秘書の岡本さまより一言ずつごあいさつをいただきました。

つづいて恒例の鏡割りがおこなわれ、社会福祉法人ライフサポート協会理事長 村田さまの発声で乾杯がおこなわれました。その後、食事をとりながら和やかな懇談があり、親睦を深める機会となりました。

会の後半では、住吉地域活動協議会会長の上村さまが駆け付けてくださり、ごあいさつをいただきました。最後は、部落解放同盟大阪府連合会 住吉支部支部長 友永健吾が締めくくりのあいさつをおこない、閉会しました（参加者61人）。

防災学習会の報告

1月20日（土）午後2時半から 4時まで、住吉住宅集会所にて能登半島地震の物資支援の報告と防災学習会をおこないました。

学習会の前半では、当財団職員の藤本が 1月5日から 8日まで、能登半島珠洲市に物資配達した際の報告をおこないました。被災地に赴き見て感じたことを写真を用いながら報告しました。

学習会中盤では、発災時における住吉地区にある主要な施設の対応と、昨年におこなわれた避難訓練の報告を町会の浜田さんよりお話いただきました。

終盤では、自宅での備えの方法や被災時の家族や知人との連絡の取り方などを社会福祉法人ライフサポート協会の松岡さんよりお話いただきました。

3人のお話は、「災害時には自助・共助が一番大事」というメッセージが込められていました。会場48人、オンライン3人が参加し、熱心に話を聞かれていました。

訃報

長年にわたって当法人の役員を歴任し、財団を支えていただいた平澤徹さんが去る1月15日に82歳でお亡くなりになりました。平澤様の生前の当法人に対する貢献に感謝の意を表すとともに衷心よりご冥福を祈念申し上げます。

能登半島地震に係る災害義援金の報告

2024年1月に発生した能登地方を震源とする地震で被災された方々を支援するため、今年1月11日から 1月末まで、すみよし隣保館 寿 などで義援金を受け付けました。合計50,726円が集まりました。この義援金は、現地で復興支援に携わる特定非営利活動法人ＹＮＦに届けさせていただきます。ご寄付いただいた皆様に感謝いたします。尚、引き続き義援金の受付は行います。

ご寄付のお礼

2023年12月1日から 2024年1月末にご寄付をいただいたみなさまです。【木本久枝さま、神野尚実さま、他ご本人のご希望によりお名前非公開】

合計　22,000円

4月以降いただいたご寄付の合計額は

合計　1,290,000円です。

みなさまのご協力に感謝いたします。

【2023年度 寄付目標金額：150万円】

当法人では、総合生活相談（無料法律相談含む）、自主学習支援事業、就労支援事業、居場所・食育事業、識字・日本語教室支援、公益貸室事業、図書事業、人権教育推進事業などを公益目的事業として実施しています。これらはみなさまのご寄付によって支えられています（個人・団体から受け付けています）。いただきましたご寄付は、法人で実施するこれらの公益目的事業の経費、住吉隣保事業推進センターの維持管理に使わせていただきます。わたしたちの取り組みに、ご理解とご協力をぜひお願いします。

なお、公益法人に対してご寄付いただいた方は、税制上の優遇措置を受けられます。寄付額に応じて、個人または法人の所得から一定額が控除されます（くわしくは事務局までご相談ください）。

【ご寄付の方法】

銀行振込、または直接事務局へご持参ください。ご寄付の際には寄付申込書に必要事項をご記入いただきます。

＜事務局＞住吉隣保事業推進センター
住所：大阪市住吉区帝塚山東5-6-15
電話：06-6674-3732

＜振込先口座＞

大阪信用金庫　住吉支店（店番号041）
普通口座（口座番号　0115047）
口座名義　公益財団法人住吉隣保事業推進協会

賛助会員を募集しています！

賛助会員を募集しています。加入していただければ、当法人の活動をまとめた機関紙『すみりんニュース』をお送りします。また、当法人主催の指定講座に参加費半額免除でご参加いただけます。

＜年会費＞ 個人：3,000円　団体：10,000円

【申し込み方法】

所定の申込用紙に必要事項をご記入の上、年会費と一緒に当法人にご提出ください。

＜お詫びと訂正＞すみりんニュースNo.93号12頁「人権のまちづくりを考える：すみよし連続講座のご案内」におきまして、誤りがありましたので、下記の通り訂正いたします。ご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。
誤）齋藤直子（大阪教育大学教授）
正）齋藤直子（大阪教育大学地域連携・教育推進センター特任准教授）

情報を配信しています！

ホームページ
すみよし隣保館 で検索

Facebook
すみよし 寿 フェイスブック で検索

Instagram
@sumiyoshi_kotobuki

YouTube